

マタイ 4:1-9 「誘惑に打ち勝つ」

「さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、“霊”に導かれて荒れ野に行かれた。そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。『神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ』 イエスはお答えになった。『「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と書いてある』 次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、言った。『神の子なら、飛び降りたらどうだ。「神があなたのために天使たちに命じると、あなたの足が石に打ちあたることのないように、天使たちは手であなたを支える」と書いてある』 イエスは、『「あなたの神である主を試してはならない」とも書いてある』と言われた。更に、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、『もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう』と言った。すると、イエスは言われた。『退け、サタン。「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」と書いてある』 そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた」

「誘惑する者」は、主イエスに言いました。「石をパンに変えて食べなさい」「飛び降りてごらんなさい」「わたしを拝みなさい」 神の御心ではなく、あなたが思ったことをやればいい。「誘惑する者」は、そのように誘惑しました。

「神の御心を行なうか」「自分の思いを行なうか」 この二つの選択肢が、主イエスキリストの前に置かれていました。「誘惑する者」は主イエスに対して、「あなたは自分の思う通りにすればよいのだ」と誘惑しました。

わたしたちが日々の生活において直面する誘惑も、これと同じです。「誘惑する者」は、わたしたちにも現れて「あなたは自分の思う通りにすればよい」と誘います。わたしたちの前にも、二つの選択肢が置かれているのです。「神の御心を行なうか」「自分の思いを行なうか」

いにしえの日、最初の人間もまた、これと同じ誘惑を受けました。最初の人間の前に、二本の木が置かれていました。一本は「命の木」で、これは「神の御

心を行なう」ことを象徴していました。もう一本は「善悪を知る知識の木」で、これは「自分の思いを行なう」ことを象徴していました。

「誘惑する者」の誘惑は、基本的には、こういうことになります。

「重要なのは『あなたが何を欲するか』ということだ。この点において、神は重要ではない。むしろ、あなたが正しいことを選択する限りにおいて、あなたは神と対等の立場に立つのだ」

わたしたちは、最初の人間が誘惑に負けたことを、よく知っています。アダムは「神の御心を行なう」ことではなく「自分の思いを行なう」ことを選びました。そうしてこれが、今日に至るまでずっと、わたしたち人間の生き方となっているのです。

わたしたちの生き方において、中心を占めているのは、わたし自身の思いです。わたしたちの生き方において、最高の場所を占めているのは、わたし自身の願いです。

もしわたしたちの生き方を「祭壇」にたとえることができるとするなら、この「祭壇」において神としてまつられているのは、神ではなくて、わたしたち自身である、ということになります。自分自身を神として祭っている、という意味で、これを「自己の祭壇」と呼ぶことができるでしょう。

「自己の祭壇」においては、あらゆるものが、わたしたち自身の「思い」に対して、仕えさせられることになります。

すなわち、わたしたちの身近な人々、家族も含めたほかの人々が、わたしたち自身の「思い」に対して、仕えさせられるのです。わたしたちは、ひとを自分の思うように支配したい。ひとを思いのままに動かしたい。ひとを自分の利益のために利用したい、と思うようになります。そうして、ひとの中から実際に、わたしの思い通り、願い通りに、支配され、利用される人が、出て来るのです。わたしたちが、さらに誘惑に負けると、わたしたちは、ひとを搾り取るように利用し、その結果、ひとに様々な苦しみをもたらします。神様の御言葉の鏡を

覗き込むことをしないなら、わたしたちは自分が、いつのまにか吸血鬼のよう
におぞましい姿になっていることに、気付かないかもしれません。

「自己の祭壇」においては、宗教や信仰や神やイエスキリストさえもが、わた
したちの「思い」に対して、仕えさせられる可能性があります。

すなわち、わたしたちが信じている神、わたしたちが常日頃、祈りの中で呼び
求めている神、それがたとえイエスキリストであっても、わたしたちの信じる
神が、わたしたち自身の「思い」に対して、仕えさせられるようになるのです。
わたしたちは、神を、自分の願いを実現する「道具」として利用するようにな
ります。自分の願いのまま、自分の思いのまま、自分の利益のために、神に動
いて欲しい、と思うようになります。実際、わたしたちが主イエスの名によっ
て祈り求めると、思い通り、願い通りに、求めていたものが与えられることが
あります。わたしたちが、さらに誘惑に負けると、わたしたちは、いつもただ
神を「道具」として利用するだけになり、その結果、神は、わたしたちの役に
立つ限りにおいて神である、ということになってしまいます。神様の御言葉の
鏡を覗き込むことをしないなら、わたしたちは、自分がイエスキリストを拝ん
でいたつもりなのに、いつのまにか、イエスキリストを道具として使っていた
ということに、気付かないかもしれません。

わたしたちは、神様の御心と、自分の思いを、どのように、見分けたらよいの
でしょうか？

大切なことは、「御心がなりますように」という祈りを、いつもささげること
です。これは、主イエスキリストご自身の祈りでもあります。主イエスは、ヨハ
ネによる福音書の中で、こうおっしゃっています。

「わたしが天から降って来たのは、自分の意志を行なうためではなく、わたし
をお遣わしになった方の御心を行なうためである」(ヨハネ 6:38)

荒れ野において、「誘惑する者」から誘惑された時、主イエスキリストは、聖書
の御言葉を示して「わたしは、自分の思いではなくて、神の御心を行なう」と、
宣言されました。

わたしたちも、この点において、主イエスに倣うものであることが出来ますように。わたしたちに対しても、神様の御心は、いつも聖書の御言葉を通して、明らかに示されています。

しかし荒れ野において、「誘惑する者」が二度目に誘惑した時には、状況が少し変わっておりました。今度は「誘惑する者」は、聖書の御言葉を使って、主イエスを誘惑したからです。「誘惑する者」は、聖書から実に巧妙に御言葉を選んで、主イエスに示しました。

この点において、わたしたちは注意を払う必要があります。聖書の御言葉を読んだとしても、わたしたちは、それを自分の都合のよいようにしか受け取らず、自分の思いを実現させるためだけに御言葉を使う、ということがあるのです。

「誘惑する者」は、三度目の誘惑において、誘惑の本質をあらわにしました。自分自身を中心に据え、自分自身を最高の場所に置くという「生き方」が人格化したもの。これこそが「誘惑する者」の正体です。主イエスキリストは、これを「サタン」と呼んで、退けられました。

はたしてわたしたちは「自己の祭壇」から、自分自身を取り降ろして、神だけを神として生きることができるのでしょうか？ これは、どんな人間にも、できないことでありましょう。自分自身を人生の祭壇から取り降ろすというようなことは、わたしたちには到底不可能なことです。

しかし、主イエスキリストは、わたしたちのために十字架におかかりになり、救いを達成してくださいました。

すなわち、パウロが言うように、主が十字架で死なれたとき、わたしたちも、主と共に十字架につけられて、主と共に死んだ、とされているのです。主イエスキリストが、聖霊を通して、わたしたちの内に生きていてくださる。それゆえに、生きている者は、もはやわたしではなく、主イエスキリストである、とされているのです。

たとい、わたしたちが、自分で自分を降ろすことができないとしても、わたしたちが十字架の恵みに与るときに、わたしたちは主イエスキリストと結ばれ、主の十字架の死に与り、主がわたしたち自身を降ろしてくださるのです。

このことは、ただ、信仰によってのみ、実現せられます。

「わたしは主に結ばれている。わたしは主と共に死んだ。主がわたしのうちに生きておられる」 このことをわたしたちが信じ、受け入れるときに、わたしたちは「自己の祭壇」から解放されて「キリストの祭壇」に仕える者となるように変えられるのです。

神の御心は、どこにあるのでしょうか？

御心は、常に、聖書の御言葉を通して、わたしたちに示されています。

御心はまた、わたしたちの心に注がれている聖霊を通して、わたしたちの心に、直接示されます。だれかから言われたとか、だれかから教えられたとか、自分でこう考えたとか、本を読んで学んだとかいうことではありません。聖霊を通して、神の御心が、わたしたちの心の中に、わたしたちの良心のうちに、直接、示されるのです。

このことについて、ヨハネは手紙の中で、こう述べています。

「いつもあなたがたの内には、御子から注がれた油がありますから、だれからも教えを受ける必要がありません。この油が、万事について教えます。それは真実であって、偽りではありません。だから、教えられたとおり、御子の内にとどまりなさい」(ヨハネー 2:27)

教えを受ける必要がない、というのは、キリスト教の基本的な教えや、聖書の解釈の仕方や、礼拝の説教について、まったく学ぶ必要がない、ということではありません。

わたしたちひとりひとりが、毎日の生活の中で置かれた、その瞬間、その瞬間の状況において、何が「神の御心」であるのか、わたしたちが選択肢に直面したときに、わたしたちが何を選ぶべきなのかは、神が聖霊を通して、わたした

ちの心に直接、語りかけ、その時、その時に、示してくださる、ということなのです。これが、聖霊による「内なる促し」です。

どうか、わたしたちが、いつも、聖霊を通して与えられる「内なる促し」に従って、生きることができますように。わたしたちが「自己の祭壇」に仕える者から「キリストの祭壇」に仕える者へと、変えられて行くことができますように。そのようにして、いつでも天で御心が行なわれているように、この地上でも、わたしたちの言葉と行ないと生き方を通して、御心が行なわれますように。祈りましょう。

祈り

恵み深い天の父なる神様。

わたしたちは、日々、「誘惑する者」から誘惑を受けています。その誘惑の本質とは、わたしたちが神を神としないで、自分の思いや願いを中心に置いて、生きるようになる、という誘惑です。わたしたちは、しばしば、この誘惑に負け、そればかりか、ほかのひとびとを自分の思いや願いのために利用したり、神様、あなたをも自分の思いや願いのために利用したりすることがあります。どうかわたしたちを、おゆるしてください。

あなたは、あなたのひとり子、主イエスキリストを十字架につけて、わたしたちの救いを達成してくださいました。わたしたちはいま信仰によって、この十字架を受け取ります。主イエスが十字架につけられたとき、わたしたちもまた、主の死にあずかり、主イエスが復活されたとき、わたしたちもまた、主の復活にあずかったのだ、ということを信じます。

どうかいま、わたしたちが「自己の祭壇」から自分自身を取り降ろすことが出来ますように。そうして、十字架にかかり復活された主イエスキリストを中心に置いて、新しい生き方を始めることができますように。どうかわたしたちを、「キリストの祭壇」に仕える者と変えてください。

わたしたちには、いつも、どこでも、どんなときでも、神様の御心が、聖書を通して、また、聖霊の語りかけを通して、わたしたちの心に直接に与えられていることを、感謝いたします。

どうかわたしたちが、いつも、自分の心の中に直接的に示される、聖霊の「内なる促し」に従って、大切な決断をすることができますように。どうか、わたしたちをお助けください。

主イエスキリストの御名によって、お祈りいたします。

アーメン